

論文の内容の要旨

論文題目 安部公房研究
 —植民地経験を基点として—
氏名 呉 美 姫

序

本論文では、安部公房（一九二四～一九九二）とそのテクストを〈植民地経験〉、そして〈戦後〉という時代性と関連させながら考察してみることを試みた。ある戦後作家が自らの植民地経験と戦いながら、たえずそれを現在の足元へひきよせ、時代と向き合っていく作業は、その文学世界にどのような陰影を作り、どのような方向性を与えたのかに、分析者の主な関心があった。

安部公房という作家を安易に日本文学史の異端児として規定する態度に懐疑をもちながら、この作家をあらためて戦後という時代の中で捉えなおして見ると、原点としての民族や国家という〈起源〉へ遡及しようとする欲望を無限に相対化していく様相を確かめることができる。安部はその起源がいかなる性格のものであれ、国家であれ、理念であれ、または日常であれ、それはそもそもそうであるべきという源泉的な起源でははく、自在に変化し、流動するものとしてしか捉えられないという思考を表現に貫いてきたといえる。そしてその背後にはトラウマ的な経験、すなわち植民地経験が横たわっていたものと考えられるのである。

本 論

一章 『終りし道の標べに』論—故郷・辺境・植民地—

一章では『終りし道の標べに』を中心に、敗戦状況における外地日本人のアイデンティティ・クライシスがどのような文学的テーマを形成したかをたどってみた。植民地に日本人をひきつけた理想や、普遍主義的理念が敗戦によってその根拠を失った時、〈敗戦〉とは自己の〈挫折〉の体験として捉えられることになる。したがって、その語りは自虐的に屈折しており、それは自己のアイデンティティに絡んだ経験を対象化することの困難さを示していたのである。

二章 戦中から戦後へ—初期テキストの変貌について—

二章では「名のなき夜のために」について方法論の転換を中心に考察してみた。戦時中、リルケの『マルテの手記』のような自意識の文学に深酔していた安部が、メタモルフォーゼの概念を「転身」から「変身」へと変容させることによって、戦後のアヴァンギャルド文学の表現と繋がっていく契機を考察してみた。

三章 ト라우マとしてのメタモルフォーゼ—『壁』論—

三章においては、『壁』を中心に戦後日本のアメリカ占領という現実がどのように形象化されているかを考察してみた。ここでは戦後日本とアメリカとの関係を認識するにおいて、常に安部の植民地経験が陰画として作用している様相をたどってみた。また、そこから安部テキストの大きな一つの主題系を形成する〈父殺し〉の問題も胚胎された事実を把握してみた。

四章 アメリカの表象をめぐって—「闖入者」論—

四章においては、日本という〈父〉と訣別した戦後の主体にアメリカはどのような他者を形成しているかを、「国民文学論争」のコンテクストから考察してみた。つまり六〇年代以降形成された安部公房のイメージとは違って、五〇年代にはアメリカからの独立という目標からナショナリズムに肯定的であった問題を、安部の左派的文学運動への参加と国民文学に関する言説を通して見なおしてみた。

五章 記録文学運動への志向

五章においては、前衛文学を目指していた安部がどのように〈記録〉という方法を見つけていくかという問題を同時代の文学運動の中で、たどってみた。そもそも記録文学運動は反米愛国主義的なナショナリズムの創出という観点から考えられていたが、以降、安部が寓意的な文体から写実的な文体へと変貌していく上にも、重要な意味を持っていた。さらにテレビ、ラジオ、映画、ミュージカルのような他ジャンルに目を向かわせた要因でも

あった事実を明らかにしてみた。

第六章 『けものたちは故郷をめざす』論

第六章では『けものたちは故郷をめざす』が表象している植民地主義の自覚の独自性をあきらかにする試みであった。敗戦当時の〈引揚げ〉というテーマを通して、引揚げ記の犠牲神話を、引揚げできなかった少年の視線から相対化しているこのテキストが、植民地へのノスタルジア物語の中で捨象されていた問題を前景化している点について考察してみた。

第七章 〈戦後〉的パラダイムの終焉—『砂の女』論—

第七章では『砂の女』（一九六二）における安部の〈戦後〉的パラダイムがどのように変容していくかについて考察してみた。主人公の「愛郷精神」の拒絶という問題を中心に、流動する家とモザイクのような世界への憧憬が、ノマド的文化への志向を明らかにしている事実に注目してみた。それは政治的急進主義、六〇年安保の挫折という一九六〇年代の状況によって、いわゆる日本という〈起源〉を求める動きが高まっていく中で、この作家はむしろ絶えず起源と原点を否定する姿勢をとり、新たなパラダイムを作り出そうとしていたことを意味していた。

第八章 クレオールへの夢—安部公房の植民地経験—

最後にクレオールへの関心と安部の植民地経験との関連性について論じ、論全体の概括を試みた。一九八〇年代の安部はクレオールに強い関心を表明しており、それは彼の植民地経験の裏返しでもあった。安部公房の満洲時代の経験をたどることによって、その経験がある意味ではきわめて重層的で、複雑な性格であったことを確かめることができた。逆説的にも、その虚偽の多民族主義という経験はクレオールという混合文化への関心を導いていたのである。

結

安部の植民地経験と関する言説は時代によって変化していて、同一とはいえないが、この表象は「汚れとねじれ」の起源探しではなく、起源の不在を絶えず訴え、その主体の多様性に着目していく立場であるといつてよい。支配者としての植民地経験と、被支配者としてアメリカ占領下の経験を通して、安部は被害者と加害者の両面から自らの主体を形成すると共に、さらにこうした主体すらをも相対化していくあくなき作業を続けていったのであった。

その植民地経験の表象は、初期においては植民地での安定した日常性へのノスタルジア

と、その植民地性を自覚しようとするはざまに、揺れ動くような様相を呈している。次第に自らの植民地経験を構造的に定位させる方向へと向かっていくのだが、それはいわば〈故郷としての満洲〉という表象を切断していくプロセスに通じるものでもあった。植民地経験と敗戦の記憶は、ある種のトラウマとしてこの作者に作用している。それはナショナルなものへの傾倒と離反、一方ではあまりにもたやすくインタナショナルなものへと飛躍する印象を与えている。本論文は、この二つの拮抗する方向を編年体で辿ってみたわけだが、それによって、六〇年代以降に形成された安部像に異議申し立てをし、比較的まだ研究が進んでいない五〇年代の様子を明らかにしてみたのである。